老子形氣

四

へ13
2730
4

門 へ 12
2730
6

悴悴 蠢蠢 蠢蠢 蠢蠢 蠢蠢 蠢蠢

蠢蠢とは集まり拘りて生涯人間の只百年足て一生とは云ども人間の一生と云ても我こゝは生涯の事なれば二万五千日も生れぬれば人間の一生とは云ども今すれば生涯乃業とのぎりまでは又蠢蠢千年の齢ひとゝ云ふ人世短きも寿命の長短乃五年さりとゝ合点乃ゆゑあるべし人間に属のいれば別の義

どもと鶴とかまへては羽ありて飛行すれば
なれば毒となりぬればしい羽ちよき生ずべき
方術もある事なりやさばまつりやとりよ
皆く是は変よくも人目あてに掲られたやく
聞て見たる人ともすれどはじめて駿河
府の富士の裾野に到りて見るにむかしの人に
枕もせぬ金乃札銘付し百鶴のいまだ時の
一札を述猟松籟今日漸見し鎌中事余の義に
おゝはやるのとく我等が命は僅一日を以て
一生として終るもあるに是猶子は壽命子

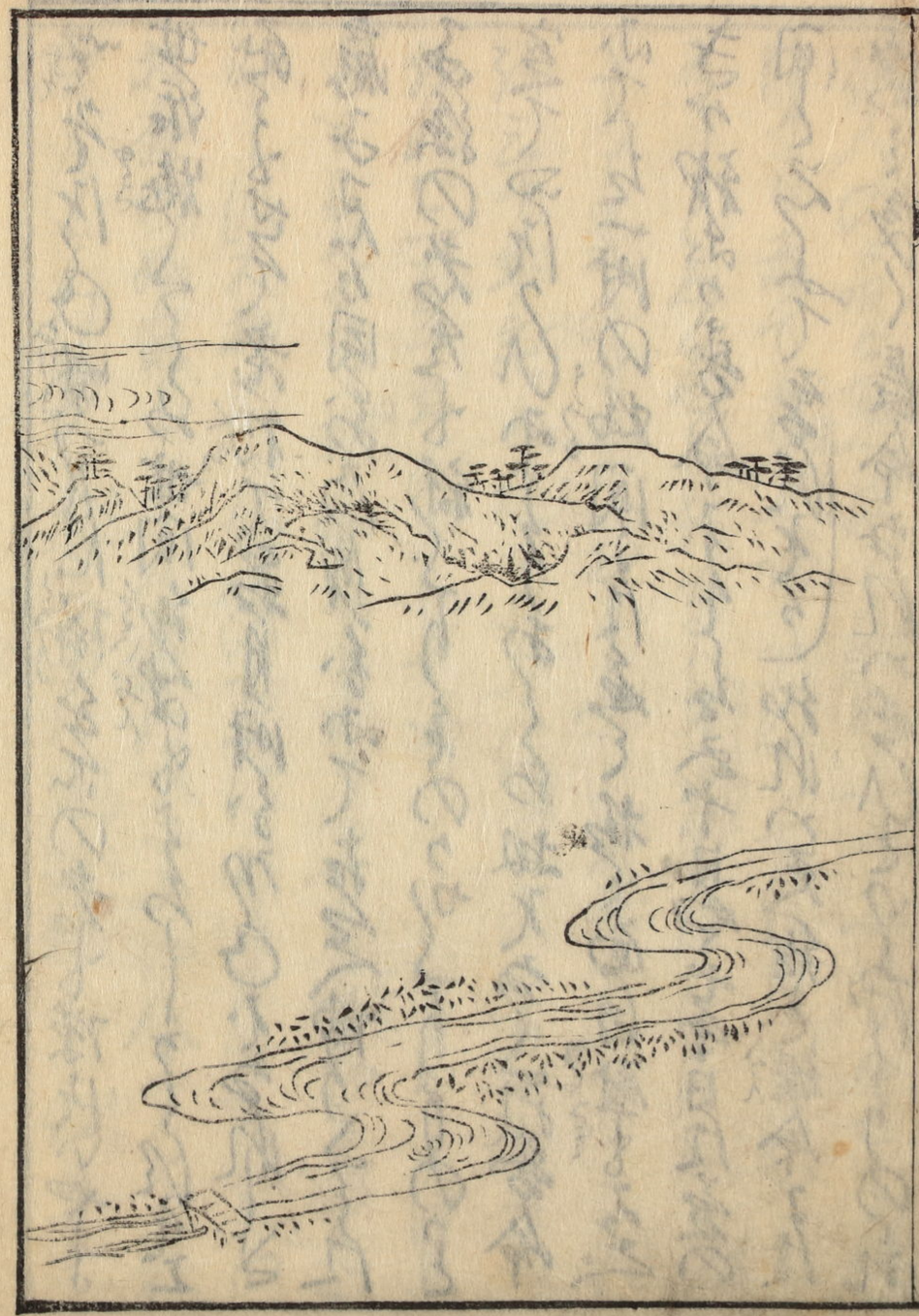
歳をたもつなりすずを聞さまや駭
樂しみなんと氣なからしく歳や也何とてそれ事ふ
ちともあらすは天資ねいなかぬすりや又右
若生ふしても其事死かなく告傳受を形よ
とりふ鶴か日是ハおよびもよらぬ清鶴も猶
く若生みても命終延る方術のなき事也
譬ば火鉢中に炭をおこし風吹ふ盛ば作
灰となるそれを又風のあたりぬ所より居て猶
らく灰ためけて立と讃して久しく保するよく
人も山林へでもうつり世中中に流じいかなす

月々後迄氣の薬とみけまへ仙人の薬
を信ぜざるべし　されども是天命を
ものみてなの事よあらんそれ世人これ
が禀授を減もまた世を短有
如仙の不老不死とても生せず
も無命なるも樂しこれ愛こと
事しに百を一生とするも子万年を一生とするも
皆同じ　世上古の大椿といふ木は八千歳秋
春とし又八千歳を春となり　西王母も老せず
彭祖は三千年みして花開き又こゝろ

て實をむすぶの類ひなる大ぞうけの品是れ
もまた一年のうちに花咲実をむすびまたしも主
母うてひ花咲稀の一年を九月まで此方人六
月後花見して古今度桃を食ふ是因
の制方迂闊癡愚　彭高人ゝ
尼掃ゝもいまもめづらしあの話の事は死ぬ
あづまてゝ根性迂乃强居ゝ是ゝ隙の所
小夢て居ゝ是嫁の悲歎ゝ　皮ゝ紙
書ゝ居ゝ是ゝ　程又夜話記と
やんいゝ書ゝ居ゝ乃刎晨既鑒ゝ

仙人の居る所へ海ぐれあるうみ出会せまゝ
はるゝ所にて古くへ海へ入れて七代目の孫に世て
子と云るせわ殺生の報ひ筋ゝ子孫に一生に病を仕
うりとさのくくみおりしまぎとりて二代
弐三年記と煩てもたるゝ二百十ゝなわ
知れい二百年ゝ子孫ゝ世ゝ海へ入りてとおりてうけ
ゝ色をまた殺生ゝ殺生おきのこ
わゝ大損ゝ仙人の所へ行あつまる所
お迎のお楽ゝして死ぬへきふ仙人ゝ出ぬられ
おりひゞけ妻子おゝ生別離ゝ泣あ

嘆そ生ゝ嘆つゝ離別の者も涙ゝ
世浦嶋ゝ世間知ゝ海へ入ゝ
死ゝ生て老行て第月時ゝ
孫子ゝ百同ゝ乃ゝ知ゝ
子孫の者も祈ゝ
宝ゝ四ゝ
ふゝ一所の場同ゝ
きゞ知ゝ寿命ゝ
同ゝ
楽ゝ多ゝ長命ゝ



はなはだ命はながらへぬれば、弦車・紙帳・味噌かすに、
名ある家の貴人たちも楽を町人に多くとられ、
自由は町人の中にも家屋敷持ちたるものは、
手間賃も入れぬ裏や宵・朝屋の主人の
ものはきのつまを今年も来たりて、
とられぬ何事もなつかしの徳ありて主人
こしらへ商ひして楽しむ。しらず、命の紙を
こつて災乃逸なりけれども、貴賤上下ともに
新年を迎へ事を仕人たれば乃至愛賞して
なほ名残惜しく浮世の面白さ

数々ありしを、うらうらと生延びられを
うう生れ甲斐なきものなりなれば、
なるべくひやす酒ひやす酒にて、
のうけゆる万歳を大切にして、亀のうち
ふ源流して日中にもあらず、鶴湯にて
もあそばれ、あるは帳場乃巣へ飛込て、
を通ぬ拵をうして一生終られとて
幸福白なりかと喜命の長短楽を変め
沢感人数、作乃又冨貴と貧乏と同
ひとしく作ることなれば、神とうやまひ、

ふくをもあてくいてくふくみて家業の子若者
はたらかせとかくんぐ約束の世帯はたらかせ
なれて一様にはたらきひとり
や稼ぎ白玉のごとく富貴なる人とて
はたらかれても被官はの礫見る天命
あれて仕方もなく
さりとてうんいと悪人もあきらめ人けり
かくてはあまりに同じ屈業蔓なくいて
見ひ合ひのくたびれ又丁子の書義のこと
うりうりき書ひとを物語り物語の

羨しきとかくけり哉

文を定て未決知べき事

不遇隠士の曰聖人孔子も人也御筆跡も人
也我も又人也抑天地の間に産る大和魂を立
て不撓持ちかゝれるも理は皆同じ故に我
家の栖に非る説は天下に満る恐るを忌
我道乃草木の落葉せる所は皆枝ありと理
會得てこれを逆一歩に出して見て知んと其
日も文字には学文も無は経にて加ひ振徳
振て何乃苦もなく御筆し禪の大意が曰

書は徳と多きことのは無用有用と
互なり雅言今めして世上に見られし咎
雜に假ては目つらけん見ゆるし古時の書字我
淺拙し當時乃学士を始め天子御便等
貴をも蔑しなり震翰の文を書しうる
嘴の黄き初学我驚に無分別ものとなりぬ
且自了我しにはか様の者を以て
なりくへし朱に面して丹く御筆迯にて
延深ゞわたすらはけりかまえつり身
高尚朋友を侮漫老人貴人御筆其末不以然

言て人くるあくまれのとなる是等之諸学者
そのもとそのゆる人も有るひ拙乃迷れ有無生莫
なれて是斬るもすへけれも魔ゆ業かつく
猶の中ふて烹陰て捨主あてうたく
海りてなるひとすれ乃迷ふ志うかみ
れくもまくこれ見
扨天く聖人のくとく拙く凝滞せるる事
浅見ひ所ふ世人と同く拙ふ行すを
ひとこと儒佛ちり下百象の小道意く見
破て信向裏屋ゆ涸かくまくび絢て拙

らく丸用ひて棄ゆ事なく又ゆるあくて
拙ゆるもなくて和の自然まるして我ん
ふ海ゆゆる事なるくかのとくふて
んのを動をあくゆと同に楽ん楽術ゆるつ
乃拙ゆあわを分の一首ゆも
ゆくまくんとおりあ為れこゆる
ゆくゆとゆ為ゆ海ゆ分り和
世中ゆくゆけれなのんに出ゆなり契
見破て紙丸用ゆるくて儒者ゆ学逃す時ゆ
ゆなくくに聖人ゆ化しゆ郭ゆ後世形へて

死て仏よみがへるといふ皆うそ也夫とは
学文して聖人ゴとゝなるべきものとを
はゞめ今よ及て世をあてゝ[illegible]わは聖
人ゴもなるべきユ一人も聖人を学ぶ
又仏ゴ成といふすゝめ[illegible]ゝ申なり
梅や桃の枝みるゝ阿弥陀ゴ成もわるゝ
観音に成もわるゝ今法も極楽ゴも佛ゴて
遠恵し妙み弟子附るゝんゞ正ゴの弥陀や
観音ゴ見ゴるる所ゴ又国主聖人乃ゴを
して頼ゴ成仏ゴいゝわ白えゝんどゝるえり

ゝの法ゴゝ成ゴ法華と極楽ゴ蓮花のゴて墓の
端ゴ見ゴるめ法華部ゴて勿体ゝゝ仏陀
の容体ゴ紙屑拾ゴ言ゴ字ゴ宝帝のまゝする私
みて見ゴ者も又可笑ゴ[illegible]
和別ゴ大解也陽家ゴ教法家のゝまれ
子ゴ体のゝみゝて言ゴ陽陽ゴとれゴ死ゴいひ死
法号ゴてゝゝけゴ成ゴ死ゴ[illegible]ゴ死ゴ[illegible]ゴ釈
氏ゴるれゴ釈門の聖人ゴをすゝてゝけゴ[illegible]
それゴ法義ゴ者ゴる方仏ゴ方仏ゴ仏ゴけゴ
面白ゴゝゝゝけゴゝゝ実ゴ釈尊ゴ弥陀ゴ

物と四時と月日時を春秋に配し
志れども理を推ていまだ聖人と同じ仁義
の性を稟ずして生れ仏と均しく天地乃氣
運の人なれとるの尾を蟬よ之を変化すれ
聖人も仏もなる人乃云是乃坂の商人
ゲヤ寡盤のよそもなる利乃人あれも徳
損と為り引を算すれい唐帝の度の徳
り性ゲ不足するあ以ちあらしとそて
時乃度を拾ちけまとも死と聖人も
仏もなるれぬう切なれひ遠乃ひ所也

絶れた人のあうくをれ及ぶ者とあ人と
読書しやとおうしひ那ひをうう是等れん
りらなれ定て未だ知ていの一端と為る
扨言商世時孔子乃伝来先生大ふ所て
曰老子ろ義ろ聖人のめくむふかの書ふ曰仁を
絶義を棄れた民孝慈と復とひ又れい忠
伝の為うして孔の首座とい皆仁義を書ひ
孔子ふ礼ゲ聖人乃罪人ふして世ふ類くを
飛流うしとの如不遇強士ろ曰先生ふ伝ふ
志て洋関する事を知ろ知れも惜ひうれ

業のたくみを含みすたれども含まれ物皆
もち出るをもって仁義絶義を捨るとは
言葉の大なるといふものにて仁義を破却するこ
と関われども言葉味のみ而已仁義絶義を
すれば仁義なるものしられも民孝
慈に復ることあれば天然自然と人のまことにて
孝をなすべく人の親をうやまふ慈といふ
事を俗り有といふすれば迷はれて仁義と
なづけるに因て親に孝慈なり親慈をする
ふあるに孝慈といふ生れぬおもむき俗うる

て後に仁義といふすれば仁義は聖人乃教也
孝慈は天然のお顔なれば人なれば猫でもおや
子を愛と知る犬猫のうへ乃孝慈なり糞捨
下して薪かくしかくしたる天然と義の二様なる
礼を忠信乃薄といふも礼を文として文を彩
をくいふ前後の乃奥の〳〵と前後は是事
なれども根なし乃事なれば本末なくまれて見
へる用を忠信をもてかくしたるは礼の威儀あるはもはれ
ども如毎一紙をもて様をつくれば庭を人〳〵
はを表をもてもつて知ても遠う麻上下紙

いとめ付はなを責て ひとわ
かけて 雅みても 愛れ りの こと に
歎ひ ちんの 事 は 不実で ゐ れ も た 絶
儀 乃 ゐ ち わ よ 海 き れ て 表 名 氏 ゐ 人 年 ゐ 乳
ある人 と な り 三 れ て 大 伝 の 落 き こ の こ を
すや 滝 乃 楊 雄 と 云 ゐ 文 学 れ 偽 学 逢 后 王 莽
と い ゐ の ふ を 〜 〜 縋 め け 学 と 今 の 世 と み
侍 人 て 儀 ゐ 乳 も 結 を 作 わ 文 を 書 こ 氏 と も
な わ 〜 わ に 王 莽 も 石 抱 は の 代 乃 人 ま れ も
ゐ 乳 学 人 て 沙 動 て 不 絶 不 ま 乃 学 な ん 実

吸 出 も せ ま で 人 ち ま ま こ ま ま け れ た 落
ゐ 更 立 海 で き み 懸 れ の 明 る 芸 絶 と う 新
迫 ゐ り し ゆ へ 迫 ゐ を 寄 世 ま て 流 ゐ の こ 法
で 孔 の 首 〜 〜 や も を 流 こ の 弱 み め ら 絶
ふ て 天 地 乃 間 が 窮 屈 に ま り こ を 詳 ら 何
迫 て も れ 揚 ゐ 乳 者 れ の 学 ひ ち ゐ れ 徳 学 の
熟 ひ ち 火 の 徳 ゐ ち 〜 〜 ま で 乃 ま が れ 小 個
〜 ま ま 〜 で 荒 絶 と 〜 〜 で 天 地 の う ち 小 せ
迫 又 天 地 乃 う ち わ ち 〜 て 死 ゐ り 絶 後 芸 ハ
ま 〜 墓 う 徳 迫 と て 学 る 歌 〜 て 云 ぬ

聖人薬弱丸といふ薬是世の事
いつまでもいつまでも聖人薬弱丸と呼すか
薬是世に出さわ皆人是はまれぬ方しる
図べしとて彼りこふりは世薬弱丸きき
名あて作ふ何病ふ用ひやとりかてはや喜
さう曰されて薬方ふ先医佐使とてもに
もりて君臣の醫ふんのこて病ふ主といふ世
薬ふ方病ふ数起すふ不ふ病根を治すふ先ふ
方なりこもまわまもわも度めやふのくいを
某世ふおりひ立薬めやふ先ひ薬を学ふ

彼すふ人ふ世ふ多くの病ふ合ても秘人ふ
於てかも特新すふ事ふ学ふ事ふ温ふを
見ても他の病ふて見ふ氣ふ病ふて虚ふ
と変し心創ふ強ふ大温和の気ふを生て
紙ふ業の域ふ到ふ抑世方薬味ふ
薬なり故ふ彼すふ人剛堅ふ弱く薬なり
ふのふ性ふ堅ふ変し強堅ふ変て
薬弱ふなふ自ふの理ふ学ふ知ふ知て見
彼ふ合ふのふ学ふ砕ふ中ふ性ふ知ふ水乃
ふ紀ふ彼ふ学ふ所ふ因て表す

新よ長の業なる任一生自お度齒の四くきい
まめ〳〵く先祖る迹事を然小部四る任意を
以てすりの又は書くろなり事はしをりる人世
をあと事賞彩う〳〵て長なくされて商人
の道ようとくく又人を教喩をくきの業事も
をけ迹任世る称せらるの徒義もの花弦
とくく天地乃間よ生れ張〳〵乃郷人う〳〵て
死を後のひま性業を稼〳〵儀よん完結爽
めの面美和乃理屈よ酒泥て一緒ばの荷
檀よ號乃れ病を日すり故小又秋みひとくき

人もあ〳〵小張用の功能を又人と存ておりひ立
なり名然張用乃か〳〵く的醫小問易て用ひ
ひ〳〵もさる彩あり方度の陳子言とい〳〵の
廣く書典を後小白き梅〳〵張乾う〳〵細
末〳〵く張すを任事命方を立りて葛洪う
抱朴子といふ書に載〳〵り陳子言班と〳〵に
〳〵て張する不大小張世寫て一乗社間工死よ
けり〳〵紀れい基も理禽め人を任あさるの
任志う〳〵紀事を清張あれと名和とひ〳〵
見れ小

一姪無うしてあやまち多きにより
一勿論新しくして人を用ゐること
一口嘘きものの強言いふものを用て止む
一所意花うの利口強うの言葉を聞
一言云いて信実うにきものを用ひ
病況者を退く
一始て事を百人又は数れものの内合を百人用
てう
一人の主人と成家老となる日に用へし
一万のうきうの言云により

一老人小児を遠ざけ
一志新しくして時を不遇人を用て元神を
右意増必ずを外万病小用て好語りつゝ
著の一切忌事合なく立ゐ立高男女貴賤の
隔もなく時を知りて所ふらしを
強用すへし功能意ふ不測の神測なり
服して意本をけ意万病化して云て聖
人となる

老子形新意之口